

特 集

中高年登山者の問題点を考える

日本は間もなく世界一の超高齢化社会を迎えようとしています。日本山岳会の平均年齢は57.5歳、当会会員の高齢化も着実に進んでいます。中高年登山者問題は、1992年全国支部事務局会議、1996年東海支部主催の全国支部懇談会と、2回にわたりパネルディスカッションを行いましたがいずれも指導者の立場としてのフォーラムでした。

今回は、当会の同好会で起こった会員の事故死を機に、他人ごとでなく、会員自身の問題として、真摯に受け止め、息の長い登山を楽しむために、中高年登山者のための特集を企画しました。

まず、中高年登山者の問題点を小倉董子会員に、健康面からのメディカルチェックを大森薫雄副会長に、山に登るための体力トレーニングを鹿屋体育大学の山本正嘉助教授に書いていただきました。

また、中高年向けの山行計画に関する各委員会、支部、同好会、同期会のアンケートも併せて掲載します。



1998 年 (平成 10 年)

6 月号 (No.637)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目 次

特集・中高年登山者の問題点を考える	
Ⅰ 自分自身の問題として……………	1
Ⅱ 中高年登山者の体力とメディカルチェック……………	3
Ⅲ 中高年者のためのトレーニング 4	
Ⅳ アンケート・中高年企画についてご紹介……………	6
カンチェンジュンガ登頂そして遭難 7	
支部だより……………	8
秋田支部 北海道支部 熊本支部	
海外の山・高所での生と死……………	9
わが支部とっておきの一山	
山陰支部・烏ガ山……………	10
岩手支部・岩手山……………	11
報告	
科学委・探索山行……………	12
データバンク研・ホームページ……………	12
「JACネパール・トレッキング」……………	13
東西南北	
火山性有毒ガス事故防止のための安達太良山の登山規制……………	14
「大島」の山巡り……………	14
バプア・ニューギニアの山旅……………	15
「樹林の山旅」という本について……………	16
図書紹介……………	17
ネパール国際山岳博物館募金状況……………	18
図書受入報告・新入会員……………	19
会務報告……………	21
さんけんだより・ルーム日誌……………	22
INFORMATION・会員異動……………	23

自分自身の
問題として

PART・I

小倉董子

昨秋、日本山岳会の同好会山行時に死亡事故が起きました。いきさつを聞いてみると、私たちの山行でも起こり得るケースですし、理事会でもたびたび話題になりました。

■事故の経緯

一九九七年十一月二日、無風快晴。スケッチ山行の二十一名は六時起床、朝食。福井県大野盆地南

東にそびえる荒島岳(一五二三メートル)へ。岐阜支部員の案内でスキー場を登りはじめる。リーダー(持ち回り)のT会員は腰痛のため調子が悪く、三十分ほど登ったところで下山。無線で一時間ごとの交信を約束。

その直後、福島幸太郎会員(会員番号九三六、七十四歳)は顔色が悪くなり、自ら「疲れたから、この辺りでスケッチして待てます」と言う。他のメンバーはそのまま登山を続ける。肩まで登ったところで、後からきた登山者から「一人倒れていた」ことを知らされる。後で聞けば、別れてから二、三分後のことだったらしい。

車の中で待つT会員と交信。その日は登山者が多く、その中の一人がロッジに知らせ、ロッジでは救急車を手配してくれたが、救急

車がきた時は手のほどこしようもなく、急性心筋梗塞と診断。メンバーは下山し、すぐ病院へ向かったがすでに死亡。駆けつけた家族の話では心臓に持病はなかった、とのこと。

死亡した福島会員は「日本山岳会入会の動機は山仲間を求め、グループに属して山を楽しむたい」と言っていた。前日の夕食時、最長老ということで乾杯の音頭をとり、ご機嫌で、午後十時には就寝、何の異常も認められなかった。

(同行した日会員談)

当会の同好会山行では、このような形式が一般的です。これまで起こらなかったのが不思議なくらい身近な事故といえましょう。

■山で死んではならない

私はこれまで全国集会など当会の多くの山行に参加して、常々驚嘆していることに、昔取った杵柄というか、男性の酒豪ぶりと、自分を含め男女ともに健啖家ぞろい、ということがあります。これには年を感じさせない迫力さえ感じます。

そして、山歩きは元気いっぱいです。若い頃から厳しい登山をめざし、心身共に鍛え抜いた会員が多いからでしょうか。登山を継続して中高年に達した人たちは、一般の中高年

らスタートした人たちと比べれば格段の差があることは事実ですが、肉体を酷使しただけ腰や膝に故障のある人も多いはずですよ。

まして、一時中断し復活した人たちは、他人には言わないだけで、過信による失敗を何度か経験していると思われまふ。

日本山岳会会員である限り、初心者はいないわけですから、登山の基本を論ずる必要ありませんが、かつて若者に呼びかけた「山で死んではならない」という言葉を思い起こし、自分自身に置き換えてほしいものです。

■己を知り、相手を知る

若い頃は気にも留めなかったことですが、自分の肉体的な弱点、持病や腰、膝などの故障をチェックし、フォローする手立て(メディカルチェックやトレーニング)を考え、努力することも必要です。加齢によって五感(視、聴、嗅、味、触)も衰えてきます。その衰えが原因で、知らず知らず集中力や判断力もなくなってきました。自然の中で危険を察知し、身を守るために、これは重要なポイントです。

自然の仕組みを知ることがもちろんですが、山仲間の性格、健康状態、登山のキャリアなどを知っていれば、

今年もさくやん会で会いましょう

最悪の状態になった時、対処、判断に役立ち、信頼感にもつながります。自分の命は自分で守る、というのが基本ですが、信頼しあえる山仲間あつてこそ、お互いの弱点をカバーしながら、安全で楽しい登山が長続きするといっても過言ではないでしょう。こうした意味からも、単独行はできるだけ避けたいものです。

山を愛する人は頑固であり、年を重ねるごとにかたくなになりやすい、とはよく聞く言葉ですが、人を受け入れることができなくなると、結果的に山仲間を失うはめになり、単独行を余儀なくされてしまいます。人と自然に対して謙虚であること、思ひやりの心を大切にしたいものです。

■発想の転換を

中高年になって衰えた体力を少しでもカバーするために、装備・道具類に気を配ることも必要です。山の装備、道具類は日進月歩、軽くて丈夫、雨に濡れても蒸れない、冷えない雨具や衣類、コンパクトで軽くて性能のよい炊事用具やテント類などを利用することも、背負う荷物の軽量化に大いに役立ちます。また、カラフルな服装や登山用品は、気持ち

を明るくしてくれるだけでなく、目立てば発見されやすいという利点もあります。遭難時には身を守ってくれるはずです。

伸縮する杖やストックは、下山時や徒渉などにも役立ちます。しかしピッケルやアイゼンなど便利な山の道具も使う人の能力によっては太股に突き刺す、つまずき滑落するなど、凶器になることもあります。ピッケルをストックに持ち替えて、見栄をはずす、焦らずに、季節、山、コースを選び、生涯山歩きを楽しみましょう。自分の肉体的弱点を素直にさし出し、肩の力を抜いて知恵を出し合い、体力と能力に応じた山歩きをしてはいかがでしょうか。発想を転換することも必要だと思います。

もちろん、日常生活でのバランスのとれた食生活とメディカルチェック、そして無理のない自分に合った筋力トレーニングがいかに大切であるか、失敗を重ねながらでしたが、その重要性を今しみじみと感じています。

現在私は六十五歳、静春時代真っ只中と信じています。よき仲間を支えられ、山歩きや海外トレッキングを楽しんでいます。(紫蘭会会長)

PART・II

中高年登山者の 体力と メディカルチェック

大森薫雄

■体力は加齢とともに衰える

近年、わが国の登山界では、熟年登山者が気を吐いており、大変に素晴らしいことだと思っております。しかしその反面、何でもないような尾根から転落したり、あるいは登山中急死するといったような事故が増えています。また、ヒマラヤのトレッキング中に高山病で亡くなるというような事故も毎年何件か報じられています。

中高年ともなると、何らかの成人病が基盤にあつて、身体にいろんな問題が起こっても不思議ではありません。

ところで、中高年者のもっとも大きな特徴は、体力が歳を追って衰えていくことであります。

人の体力は二十歳を頂点として衰退が始まり、頂点時を一〇〇パーセ

ントとして、毎年一パーセントずつ減少するといわれております。二十歳の男性の各体力の指標を一〇〇として、加齢に伴う変化をみると、もっとも低下度の大きいのは閉眼片足立ちと脚筋力で、大体六十歳では三〇(六〇パーセント)低下しています。人は脚から衰えるといわれていることがわかります。

気力の優れた人にとっては、自分はまだ若いという思い込みがあり、無意識のうちに自分の肉体にそれを期待しますが、実際には気力と体力のバランスが大きく崩れて、反射神経が鈍くなり、筋力が低下して瞬発的な動作がむずかしくなっています。持久力が低下し、疲労が早く現れ、何よりも決定的なことは、疲労の回復が遅れていつまでも残ってしまうということです。

■メディカルチェックの必要性

そこで、このような事態をまねかないためには、自分が果たして登山をやってもよいのかどうかを確かめておく必要があります。いわゆる身体的なメディカルチェックを計画的、系統的に実施しておく必要があります。とくに中高年登山者の健康管理はメディカルチェックに始まるといっても過言ではありません。

メディカルチェックの目的は、登

山活動の障害になったり、社会生活を妨げたり、生命を侵すような因子を前もって発見し、事故や障害を未然に防ぎ、すでに存在している異常については悪化させないことであります。

登山におけるメディカルチェックは、登山に関連して発生して行くことが予想される病態について、とくに詳細にチェックを行わなければなりません。

問診としては、①今までどんな病気をしたか(既往症)、②家族の中にどのような病気の人がいるか(家族歴)、③今までどんな仕事やスポーツをしてきたか、あるいはしているか(生活歴)、を聞きます。

このような中でぜひメディカルチェックをやらなくてはならない人は、①胸を締めつけられるような感じがする人、②ちょっと動いただけで息切れがする人、③頭痛や眩暈がしてふらふらする人、④顔や足がむくんでいる人です。

まず、①身体理学所見(視診、触診)、②一般検査(血液化学、胸部X線、心電図)、大抵の方々は成人病検診ということで年一回は検診を受けておられると思います。貧血はないか、糖尿病はないか、腎臓はどうか、肝臓はどうか、肺はどうか、心臓はどうかを調べます。③骨や関

節や筋肉などに異常がないかどうか。④負荷心電図(運動負荷、ホルター)といってローラの上を走ってある程度心臓に負荷をかけたときの状態で検査するもの、また、ホルター心電図といって二十四時間つけっ放しで一日の日常生活状況の中での変化をみるものでとくに不整脈の有無を検査します。⑤心エコー図検査(心臓超音波検査)といって心臓の弁膜や筋肉の状態をさらに詳しく調べる検査があります。⑥R-I心筋シンチグラムといって心臓の血流と筋肉状態を詳しく調べます。⑦心臓カテーテル検査(血管造影)といって心臓の筋肉を養っている血管の動脈硬化の

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。




重量78g.
つや消し黒 ¥17,000 送料 ¥ 600
実色メタリック ¥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、郵送でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
株式会社 石神井計器製作所 TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

状態を調べる検査があります。心臓を動かす筋肉へ行く血管が狭くなったり、通りが悪くなったり、癌を起したりしてそのために胸が痛くなったりする狭心症、それが詰まって心臓を動かす筋肉に血液が少なくなったり、まったく行かなくなったり、まったものを心筋梗塞といっており、不整脈を含めてかなりの率で突然死の中に含まれているものと考えられます。

■いつまでも山を楽しむために

以上のような検査の結果をふまえて、その人に応じた運動処方の方のアドバイスを受けることになります。

内科系疾患、とくに心疾患、高血圧などの方々は運動強度、運動量のコントロールが必要です。また肥満、高脂血症などの方々はウエイトコントロールが必要です。

運動器の立場からは、筋力の低下を防ぎ、筋力を増強させるようなトレーニングをすれば、中高年の登山にドクター・ストップはありません。それぞれの年齢に応じた山登りを楽しんでいただきたいと思います。

もし、きちんとしたメディカルチェックを受け、病気の程度をよく知ってコントロールしながら山に登ったり運動に励むなら、たとえ何らか

の持病があっても十分可能である、と私は考えております。

なおスポーツ医制度には、日本体育協会の公認スポーツドクター制度、日本整形外科学会の認定健康スポーツ医制度、日本医師会の認定健康スポーツ医制度などがあります。

日本山岳会ではハガキで事務局気付医療委員会宛にご相談なさるのもよいでしょう。

(神奈川県立厚木病院院長)

PART・Ⅲ

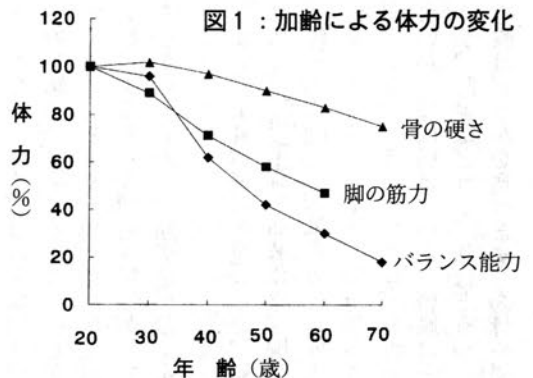
中高年者のための トレーニング

山本正嘉

■トレーニングで何がかわるのか？

中高年と呼ばれる年頃になると、バテる、膝や腰が痛む、筋肉のけいれんや筋肉痛が起るなど、若い頃には想像もしなかったトラブルに悩まされるようになります。そこで皆何とか快適な登山をしようと、登山中に様々な工夫をこらしていると思

図1：加齢による体力の変化



います。このような努力も無駄ではありません。

しかし、これらのトラブルを確実に防止する唯一の方法は、普段からトレーニングをして体力を向上させるしかありません。普段全く運動しない人がたまに山に行き、そこでどんなに快適に歩く工夫をしようとしても、ほとんど効果はないと思うほうがよいでしょう。

体力のトレーニングは、事故を防ぐためにも重要です。中高年者の山の事故でもっとも多いのは、下り道で転んで骨折する、というパターンで、およそ七割を占めています。下りではバランスをとりにくい上、着地の瞬間には脚に体重の二倍以上もの衝撃力がかかります。

図1は、普段運動をしていない人の体力が加齢によりどう変化するかを、二十歳の時の体力を100パーセントとして示したものです。バランスの能力、着地衝撃を受け止めるための脚の筋力、そして骨の強さのいずれも若い頃に比べて大きく低下しています。このような身体で登山をするのはいかにも危険だといえるでしょう。

■一番のトレーニングは登山だが

登山にとって一番のトレーニングは、できるだけたくさん山に登ることです。マラソン選手ならばたくさん走ること、水泳選手ならばたくさん泳ぐことがまず必要なのと同じです。山は好きだが下界でのトレーニングは嫌いだという人も多いと思いますが、頻繁に山に行ける人ならばそれでも問題はないのです。

個人差もありますが、一〜二週間に一回のペースで山に行ける人ならば、山行自体がよい体力トレーニングとなるので、下界で特別なトレーニングをしなくても大丈夫でしょう。だが実際には、このような恵まれた人は少ないと思います。一カ月に一回しか山に行けないという人は、やはり下界で何らかのトレーニングをしておかないと、身体がついていか

そこで以下このような人のために、下界でできる簡単なトレーニング法を紹介します。

■筋力を強くする

脚の筋力を強化すると、余裕をもって歩けるようになるので、バテにくくなります。バランス能力や瞬発力も向上し、転倒しにくくなります。骨が強くなり、折れにくくなります。けいれんや筋肉痛も起こりにくくなります。また、ふとももの筋肉を鍛えれば膝関節痛、腹筋を鍛えれば腰痛の予防・改善に効果があります。このように筋力トレーニングは実に多くの効果をもたらしてくれます。脚の筋 ふとももの筋肉を強化するにはスクワット運動をします(図2)。手を腰に当て、足を軽く開き、ゆっ

くり膝の屈伸運動をします。脚は九〇度くらいまで曲げます。

ふくらはぎの筋肉を強化するにはかかと上げ運動をします。壁などに手を当ててバランスをとり、かかとをゆっくり上げ下げします。段差のあるところでつま先をかけ、かかとを宙に浮かせて行うと効果的です(図3)。

腹筋 足首を押さえて上体起こし運動(腹筋運動)を反復します。腰に負担をかけないように、膝を曲げ、背中を丸めるようにして行うのがポイントです。手は頭の後ろで組むか、それがつらければ膝のほうへまっすぐ伸ばして行います。上体を完全に起こすのがつらい人は、仰向けに寝た姿勢で、腹筋に力を入れ、頭を起こして自分のへそをのぞくようにす

る「へそをのぞき運動」を反復してもよいでしょう(図4)。

腕と上半身の筋肉 ストックを使う人や重い荷物を背負う人は、腕や上半身の筋力も必要です。腕立て伏せ運動を反復します。平らなところでやるのがつらい人は、机にもたれて「斜め腕立て伏せ」をします(図5)。

これらの筋力トレーニングは、十〜二十回くらいを一セットとして一日に約三セット、一週間に二〜三回程度やるとよいでしょう。

■呼吸の仕方 いずれの運動も、体重を持ち上げる動作の時(力を入れる時)息を吐き、その反対の動作の時息を吸うのが原則です。

図2のスクワット運動では脚を伸ばす時息を吐き、曲げる時吸います。図3のかかと上げ運動は、かかとを

上げるとき息を吐き、戻す時息を吸います。図4のへそをのぞき運動は、へそをのぞくとき息を吐き、上体を戻す時息を吸います。図5の腕立て伏せでは、腕を伸ばすとき息を吐き、曲げるとき息を吸います。

■持久力を強くする

毎日あらゆる機会を

とらえて歩くこと、階段の上り下りをするとういでしょう。これらの運動は日常生活、運動、仕事の中で必ず行うはずですから、電車やエレベーターをなるべく使わない決心をすればよいのです。とくに階段の上り下りは、運動様式が登山とよく似ているので、大きな効果があります。歩く場合は早歩きにします。階段登りはきつい運動なので、ゆっくりでも十分ですが、それでも物足りなくなったら、早歩きや一段とばしで上がる、つま先だけをつかって上がるといった工夫をするとういでしょう。なおジョギングは、膝や腰、心臓・血管などに大きな負担がかかるので、これまで運動をしてこなかった人が急に始めることは避けてください。

歩きならば一日の合計時間が最低三十分(あるいは万歩計をつけておいて一万歩以上)、階段ならば合計の獲得高度が三〇〇メートル以上、といった目標を立てて行うと励みになってよいでしょう。

(鹿屋体育大学スポーツトレーニング教育研究センター助教)

*参考文献 山本正嘉「登山に必要な体力とトレーニングの仕方」13

3『岳人』五九二〜五九四号(一九九六年十一月号)

*イラストは「岳人」より転載。

PART・IV

アンケートより
中高年企画について
ご紹介します

集会委員会

会報のインフォメーション欄に
毎号数多くの山行案内が掲載されて
いますが、今回は委員会、全国の支
部、同好会、同期会にアンケートし、
会報に掲載されない情報を収集しま
した。

委員会の企画はすべて会員に公開
されていますが、同期会や同好会の
ものには、公開されたもの以外は参
加できないものもあるようです。支
部行事も参加可能な支部とそうでな
い支部があります。詳細は直接お問
い合わせください。

●自然保護委員会 自然保護全国集
会を十一月十四、十五日に京都芦生
の森で開催、芦生の森観察山行。自
然保護シンポジウムを三月十四、十
五日に山梨忍野周辺で開催。木曾赤
沢自然休養林学習山行も予定。

●指導委員会 研修会には毎回若者
に混じって多くの中高年会員が参加

している。初心者を対象にした企画
はとくにないが、向上心、意欲のあ
る方なら、レベルは全く別問題とし
てあらゆる研修会に参加可能。

●科学委員会 十一月に中高年登山
のシンポジウムを開催。

●北海道支部 支部として実施して
いる山行はすべて初心者・中高年層
を対象に計画している。ハードな山
行は各自所属する団体で個人的に。

支部行事の予定としては、七月三
五日〓羅臼岳、十月三〓四日〓日高
山脈・深田久弥氏ゆかりの山。

●青森支部 中高年者が多いことを
認識し、支部会員が参加しやすい山
行計画を立てている。

●富山支部 一般の方への新聞社主
催カルチャー教室などで中高年登山
教室に協力しているが、支部として
の企画はない。

●福井支部 十一年前、県岳連の中
高年対策として北陸百山を登る会を
結成。現在百三十余名の団体になっ
ている。例会や例会登山時に中高年
入会者には教育をしているが、とく
に支部外に向けての企画はない。

●山梨支部 支部自体が中高年者の
集まりなので特別な企画はなく、講
習会なども県岳連主催のものを利用
している。

●静岡支部 支部会員の大部分が海
外や国内での登山経験者で、新入会

員も経験を重視して推薦している。
春・秋の支部山行は、体力と年齢に
合わせサポートをつけての山行方法
をとっている。

●関西支部 十年間に五十回の支部
山行を行ってきた。山行委員自体が
高齢なので、委員が行ける範囲とい
うことが中高年への配慮となってい
る。山行予定は支部報（本部でも関
覧可能）に掲載。

●東九州支部 月一回は初心者指導
を行っている。支部外からの参加希
望者は事務局へ連絡を。山行予定は
七月高知・立石山、八月別府湾リレ
ー登山、九月大分・渡神山、十月福
岡・平尾台能ヶ鼻、十一月宮崎・鬼
の目山、十二月大分・樋桶山、一月
大分・大将陣山、二月大分・縦の木
山、三月宮崎・釣鐘山。

●同好会・山げらの会 月一回、J
ACルーム一〇四号室で「自宅でも
できる自主トレーニング講座」を開
催。参加希望者は三井吉田江（TEL・〇三
三四五一―五三八八）まで。

●同好会・アルパインスキークラブ
スキー登山と安全について、毎月例
会でテーマを決めて勉強会を行って
いる。約百名のクラブ員の割以上
が中高年対象のカルチャー教室で安
全登山の指導をしている。

●同好会・アルパインスケッチクラ
ブ 年四回程度開催するクラブ山行

は、スケッチ主体のため本格的山行
ではない。山の絵を描くことに共通
の喜びを持つ同好会会員対象のため
一般会員の参加はできない。

●94同期会 会員相互の懇親のため
の山行と考え、ハイキング程度に限
定。企画は会報で紹介している。

●95同期会 中高年に対する特別な
企画はないが、年四回程度の山行を
企画し、二回は会報で紹介している。
懇親とはいえ山行当日は下山まで酒
類を飲む人はいない。

●96同期会 年に山行一回、講演会
一回を開催。会報に掲載している。

●その他の企画 六月二十七日(土)
三時より「中高年者の様々な登山」
と題する講演会をルームで行う。講
師・橋村会員（東海支部）、小川会
員 参加費二千元 申込は中川評議
員（TEL・〇三三五六八三―四一五〇）

環境月間 (6月1日～30日)

環境の日 (6月5日)

実施目標

地球温暖化防止のために 環境保
全活動の普及・啓発

テーマ

「地球と未来の仲間のために
暮らしを変える わたしから」
総務委員会

カンチェンジュンガ登頂、そして遭難

日本山岳会青年部
カンチェンジュンガ登山隊1998
隊長 谷川太郎

5月15日、14時20分、私たち第一次アタックの5名(谷川、赤坂、奥田、広瀬、椎名)は、世界第3位の高峰カンチェンジュンガ(8586m)の頂に立った。アタックキャンプを出て、11時間後、悪天の兆しに脅え、稀薄な大気にあえぎ、持てる力のすべてを出しきった快心の登頂であった。

私たちは握手を交わし、肩をたたき合い、疲れも忘れて夢中で写真を撮りあった。応援し、協力してくれた人たちに心から感謝し、これまでの些細な苦労を風と共に吹き飛ばした。

頂上での小1時間、私たちは飲み込まれるような雄大な景色を心ゆくまで楽しみ、目的を成就した幸福を存分に味わった。

異変を感じたのは下山を開始して1時間ほど後のことである。登りでは私と共に頂上直下のルートワークを行い、調子のよさを見せていた椎名厚史がなかなか降りてこない。ようやく姿を見せると、何気ない雪の斜面を後ろ向きで恐る恐る降りてくる。しかも、5歩以上連続することはない。2、3歩、歩いては立ち止まり、また歩きを繰り返す。この状態ではどこで滑落しても不思議ではない。大丈夫か、というこちらの問いかけに、力なく「ハイ」と返事のみに返す。

アタックに至るまで、登山活動全般を通じ、おそらく隊員中最強の体力を誇ったあの椎名が、これほどまで消耗するとは、私にはにわかに信じ難いものがあった。

他のメンバーの疲労もそれなりに激しく、5人がバラバラになるのは危険と判断し、1本半75mのロープで全員を結びあう。風雪の中を延々と気の遠くなるようなスタッククライミングを繰り返し、登りに張った固定ロープによりやくたどり着いたのは、夜の11時ごろであった。

これで何とかなる、と安堵した矢先のこと、遅々とした歩みながら必死の下降を続けていた椎名が、懸垂

下降の最中、意識を失って昏睡状態に陥ってしまった。標高約8200m付近である。ヘッドランプの下で必死の介抱をするも、眠るようにバツリ倒れたまま目を覚まさない。メンバーの体力も限界に近く、椎名を下ろす術はすでない。

選択の余地はなかった。私が椎名と共にビバーク、他の3名はこのままアタックキャンプまで下山し、翌朝、酸素を持ってビバークする2人をレスキューする。

それぞれに厳しく、困難な課題であるが、椎名を救う道はこれしかなかった。

ツェルトをかぶり、椎名を揺すったり擦ったりしながら時を過ごした。朝まで待てばあるいは、と一縷の望みを持ち続けたが、夜中の3時ごろ、彼は眠りながら静かに息を引き取った。その後、彼の体がずり落ちないよう彼自身のピッケルで固定し、ナイフで遺髪を切り、ツェルトをかぶせ、あたりの雪をかぶせた。

ベースキャンプに椎名の死亡を伝え、赤坂と奥田がまだアタックキャンプに帰っていない、と信じられないことを言う。

調子の悪いトランシーバーに、奥田の声が入ってくる。

「奥田です。目が見えなくて動けません」

わりとしっかりした話し方に安心する。

「谷川です。すぐ行ってやるからその場を動くなよ」

下りながら途中の固定ロープを20m回収し、急いでクローアールの下にいる人影へ向かう。てっきり奥田だと思っていたその人影は合流してみると赤坂であった。どこかで滑落したのか頭に傷を負い、疲労の極に達しているようだった。

ロープを赤坂と結び合い、東へわずか3~400mの距離にあるキャンプを目指した。

100m進むのに3時間以上かかっ

た。途中、赤坂は何度も転倒し、ロープにぶら下がった。斜面の傾斜が緩かったので巻き込まれることはなかったが、私はその度に赤坂を叱咤し、頼むから頑張ってくれと哀願した。赤坂は最後の最後まで奮戦し、テントまで200mという位置でついに力尽きた。キャンプ3から長駆かけつけた田辺と合流し、斜面を削って座らせると、そのまま休息するように安らかに息を引き取った。標高7900m付近、午前9時30分であった。

遺髪を切り、田辺と共にキャンプ3から上がってきた山本、長久保に手伝ってもらい、その場に穴を掘って埋葬する。

椎名にしても、赤坂にしても、われわれ登山隊の力では遺体を収容することは不可能に近く、現場で埋葬という形にするのが精一杯であった。

その後、田辺、山本、そして1人アタックキャンプに帰り着いていた広瀬が奮闘し、酸欠で目が見えず孤立していた奥田の救出に成功、3人目の犠牲者を出さずに済むことができた。

事故発生後、現地ネパール人スタッフ、コスモトレック、日本大使館、在京留守本部、その他多くの方々の迅速かつ適切な処置により、負傷者3名は20日には日本帰国、即入院し凍傷の進行を最小限に抑えることができた。

今回の事故では、関係者の方々には多大なご迷惑をおかけしました。この場をお借りして心からお詫び申し上げます。事故の詳細や検討については、今後ある程度の時間をかけてできる限り正確にまとめたいと考えております。今回は取り急ぎ、ごく簡単に記し、仮報告とさせていただきます。

最後に、赤坂謙三と椎名厚史が世界第3位の高峰カンチェンジュンガの頂に立ち、体全体でその感激を味わったことを、多くの方々が記憶にとどめてくだされば幸いです。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

平成九年度支部山行

月山(六三九メートル)地元の鳥海町笹子地区では、毎年御神体のあるこの山に登り、盛大に礼祭を行っているが、今回はこの祭日に合わせて九月七日に実施した。

横淵集落から延びた杉林の急坂を登り、林道をたどって山頂近くに出る。さらに見落としやすい登山道を登り、一時間ほどで雨に煙る神社と三角点のある山頂に着く。大森山は雨のため中止。参加者二十名。

九九九峰と大沢森(一一七八メートル)平成八年八月八日に実施した語呂合わせ登山に本年もあやかりたいと、九九九峰に登る企画を立ててみたが、県内に該当する山が見当たらない。そこで柳田委員が探し当てた小和瀬奥地の標高点九九九メートルを九月九日に登ることになった。

この峰は大白森と大沢森の中間にあり、タケノコ採りの道ともなっていて、小和瀬より直接延びている。駐車地より崩壊した林道をたどり、沢を横切って急傾斜の尾根道に取り付く。登り一方の尾根を登ると、主稜線上の九九九峰に着く。眺望はいいが、少し先に縦走路との分岐点があり、一時間二十分で全員集合する。

昼食後、健脚組は大沢森と、さらに西に延びる内大沢森まで藪こぎを楽しみ、晴天の秋山を満喫した。参加者十六名。

三森山(一一〇二メートル)三内村黒沢地区の国道上から南に望まれる山で、眺望が優れていることから天下八方の異名をもつ。数年前に登山道が新設されたが、一般的にはまだ知られていない秘峰でもある。十一月三日実施、参加者十名。

上黒沢集落より林道三森線を行くと大造林地に至り、その先の山頂直下の少し手前に登山口がある。杉の造林地を小沢を横切って進むとブナ林の中の道となり、急登の連続となつて主稜線に出る。初雪を踏んで左へ二〇〇メートルほど行くと山頂に至る。登り約二時間。

異名のごとく眺望は抜群で、晴天

のもと、初雪に輝く焼石連峰や真昼、和賀の山並みを満喫した。

なお下山後、有志が対岸にある白木峠(六〇二メートル)に登り、平成九年度の支部山行を終了した。

(佐々木民秀)

北海道支部

黒岳・雪洞山行

雪洞利用の支部山行も、第一回の無意根山、昨年の白井岳と札幌近郊の山が続いたが、今年は道路網の整備などで時間的距離が道央からも近くなった大雪山系黒岳で、三月十四、十五日に開催した。例年にくらべ積雪の少ない今年は、雪洞適地の選択が心配されたが、地元、上川町在住会員の偵察山行で雪洞設置場所も決まり、参加者十五名(会員十二名、入会予定者三名)は十四日十二時、層雲峡ロープウェイ駅に集合した。

急に参加できなくなった地元の保田会員を参加者に紹介した後、ロープウェイ・リフトを乗り継ぎ、前日の新雪をラッセルして十三時三十分、標高一六〇〇メートルの雪洞設置地点に到着した。ただちに左右二カ所から雪洞掘りを開始。硬く締まった雪に難渋するも「のこ」「剣先スコップ」が威力を発揮し、約一時間後左右が貫通。全員の協力で二時間半

後、大雪洞が完成。壁にはローソクが立てられ、明るく快適な環境となる。早くも「明日の好天」を祈って四、五人が輪になり杯を傾ける。久しぶりに会う会員同士、酒に山にスキーに話が弾み、九時まで歓談した。天気予報では好天は期待できそうもなかったが、十五日朝は風もなく小雪がちらつく程度。七時に雪洞前をスタート、前日来の新雪をラッセル、頂上直下の硬い急斜面を全員無事登り、太陽が顔を出し始めた八時三十分、黒岳頂上(一九八四メートル)に着いた。

無風の頂上からは、大雪山・御鉢平を囲む山々が徐々に現れ、展望を楽しむことができ、写真やスケッチにのんびりと一時間を過ごした。そろそろ下山しようという頃から太陽が隠れ、視界が悪くなり始めた頂上を後に、新雪の急斜面を滑降開始。それぞれ素晴らしい山スキーを楽しみながら全員無事下山。ロープウェイ駅舎で休憩。麓の層雲峡温泉につかり、疲れをいやした。(藤野和男)

熊本支部

支部総会を開催

平成十年度の支部総会が四月二十六日、熊本市のNTT熊本会館で開かれた。総会には会員十五名が出席

し(委任二十二名)、平成十年度事業計画など三議案について慎重審議を行い、いずれも原案通り可決、承認した。また役員改選に関連して、支部規約のうち役員の任期に関する部分を、本部制定の「支部設立並びに運営に関する規定」にしたがって改正した。平成十年度の事業計画、支部役員は次の通り。

●事業計画

八月三十日 夏季例会 山の映画と
ビールの夕べ

十月二十四、二十五日 秋季例会
一月十日 新年晩餐会

二月七日 干支の山 卯の鼻

三月二十、二十一日 春季例会

また今年度からの新しい事業として県境線のトレースを計画している。本県は九州の中央に位置し、福岡、大分、宮崎、鹿児島、四県と境を接して、海上を除く陸上部分の県境は四〇六キロある。この県境線の踏破を三年かけて達成したいと計画し、具体的な実施方法を検討している。

●支部役員

支部長 本田誠也
副支部長 工藤文昭 神谷平吉
常務委員 田上敏行
委員 門脇愛子 馬場博行
監事 広永峻一 丸尾龍一
中村恵二

(田上敏行)

海外の山

高所での生と死

江本嘉伸

五月は、ヒマラヤの結果が出る季節だ。今年もネパールやチベットから、朗報と悲報が届いた。

カンチエンジュンガでの日本山岳会青年部隊の登頂と下山時の遭難は、隊の実力について、ふたつの感慨を抱かせる。八五〇〇メートルの高所

を五人ものアタッカーが無酸素(睡眠中は吸ったが)で行動することの無理と、シエルパの助けを借りず、自力でルートワークと荷揚げをし、全員が頂上に立ったことへの驚き、とりわけ谷川太郎隊長の強さである。

同じ青年部隊で九六年K2に十二人が登頂した時、二次隊の先頭をき

って登頂した山本篤隊長は、なんと四時間も頂上で最後の隊員を待った。下山の難しさを考えれば、これは本来バイ話である。好天と酸素があったからこそなし得た、ぎりぎりの登頂だった。

今回のカンチ隊は、トップの谷川隊長と最後の広瀬隊員の差は五十分しかない。それだけの力が、五人に

はあった。まして、生還できなかったひとり、椎名隊員は前日までルート工作の先頭に立っていた。下山の急激な衰弱など誰も予想できなかったらう。

それでも、二人が生きて帰れなかった。そのことの総括はしっかりなされるであろうが、K2、雪崩に遭遇した昨年のダウラギリ、そして今回、と若手が「シエルパレス」の登山に真剣に取り組んだことは評価されなければならない。

ラッセル・ブライスという優れたガイド・クライマーの助けを得、八〇〇〇メートルから上は酸素を使

たが、純素美代のチョモランマ登頂(五月二十五日)と無事下山は、日本人のヒマラヤの高峰登山に新風を吹きこむものだった。どこの山岳会にも所属せず、どちらかといえば取材の仕事からヒマラヤに関わった女性、いきなり世界最高峰に登ったという点では、九三年に英国女性として初登頂したレベッカ・ステイブンズに似ている。

いきなり、といったのはそういう印象があるからで、実はチョー・オユーを二度も無酸素で登り、チョモランマにも三度目の挑戦である。九

六年春、アイマックス映画撮影隊に参加し、スペイン女性アラセリ・セ

ガラとともに登頂予定者になっていたが、この時はサウスコルで断念、

昨年は北側八四〇〇メートルまで達しているから、高所にはよほど強いのであろう。なんとなくリッジウェイの著書の邦題「ちよっとエベレストまで」を思い出させる出来事で、

登頂の一報をEメールで伝えたのも新しい。

南側からのエベレストには、自動車事故で右足をなくした米人、トム・ウィタカー(四九)の「義足の登頂」が話題となり、チョモランマでも、続のほか日本勤労者山岳連盟隊の八人登頂、また昭和山岳会隊の四人も登頂するなど成果が多かったが、

一方で、外国隊の四人が遭難死した。中でも、詳細は不明だが、ウズベキスタンの登山家夫婦の悲報はいたましい。夫人が第一ステップ直下まで登って力尽き、夫は悲嘆のあまり、後にカンシユン氷河側に身を投じたという。

別の紙面で詳しく報告されなければならぬが、五月二十日から松本市で開かれた「第三回登山と高所環境に関する国際医学会議」は、地味だが熱のこもった国際会議だった。

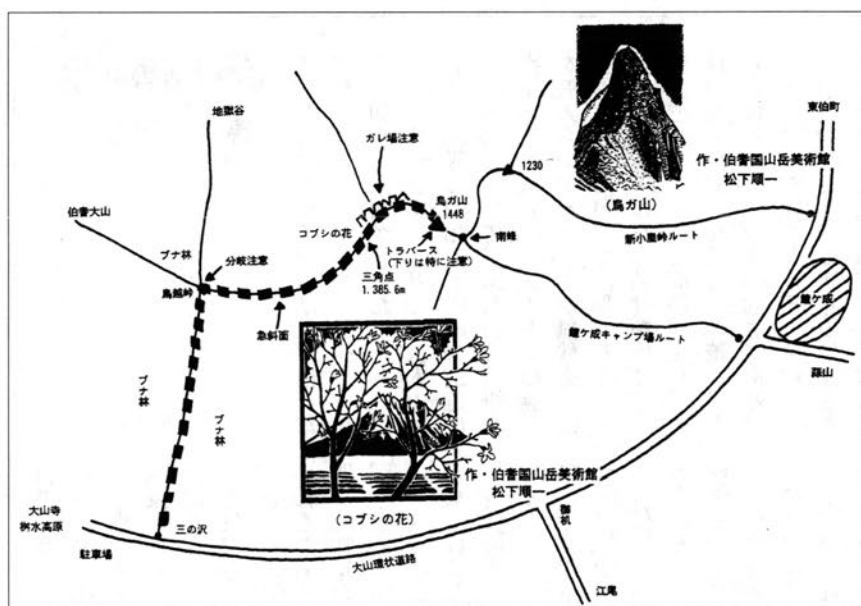
ここでの議論の成果が医学専門家だけでなく、高所登山の現場で活かされることを強く期待したい。



鳥ガ山は伯耆大山の東方に位置し、山容はカラスが羽根を広げた様子に似ているところから、その名が付いたといわれている。『分県登山ガイド・鳥取県の山』（山と溪谷社）では、そのピラミダルな山容から「山陰のマッターホルン」と紹介されている。

山頂には大きな岩がドンと乗っており、まるで上げたカラスの頭のよう、気味の悪い感じがする。しかし、眺望は素晴らしく、荒々しい大山東壁、なだらかな蒜山、うねうねと広がる中国山地と三六〇度のパノラマを楽しむことができる。

今回は三の沢から鳥越峠を経由して、鳥ガ山へのコースを紹介しよう。ただしルートは十分に整備されていないので、目印、ガレ場、岩壁のトラバースには注意してほしい。



山陰のマッターホルン
からすがせん
鳥ガ山

山陰支部

1	コースタイム	伯耆大山・三の沢-60分-鳥越峠-120分-鳥ガ山山頂 (参考 鏡ヶ成-105分-鳥ガ山山頂)
2	記 録	松下順一・松下千鶴共著『大山を歩く』（たたら書房）
3	地 図	国土地理院（1/25,000地形図）伯耆大山
4	交 通	J R 伯耆線伯耆溝口駅よりタクシーで登山口へ40分 (溝口タクシー TEL・0859-62-1030) J R 米子駅よりタクシーを利用する場合は登山口まで60分
5	付近の観光地	伯耆大山・大山寺 スキー場 皆生温泉（J R 米子駅よりバス、タクシーあり） 伯耆国山岳美術館（J R 溝口駅よりバス、タクシー） 植田正治写真美術館（J R 米子駅よりタクシー）
6	そ の 他	伯耆国山岳美術館は会員によるプライベートの山の中の小さな美術館です。山陰方面へお越しの際にはぜひお立ち寄りください。
7	参 考 図 書	分県登山ガイド『鳥取県の山』（山と溪谷社） 『大山を歩く』（たたら書房） 伯耆文庫『大山をめぐる山々』（今井書店） 『山陰の百山』（日本山岳会山陰支部） 『大山・その自然と歴史』（山陽新聞社）
8	問い合わせ先	吉川秀明（会員番号11363） 松下順一（会員番号11358）

岩手支部

岩手県の最高峰・一等三角点の山

いわてさん

岩手山 (2038m)

別称岩鷲山・南部片富士

ふるさとの山に向ひて言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

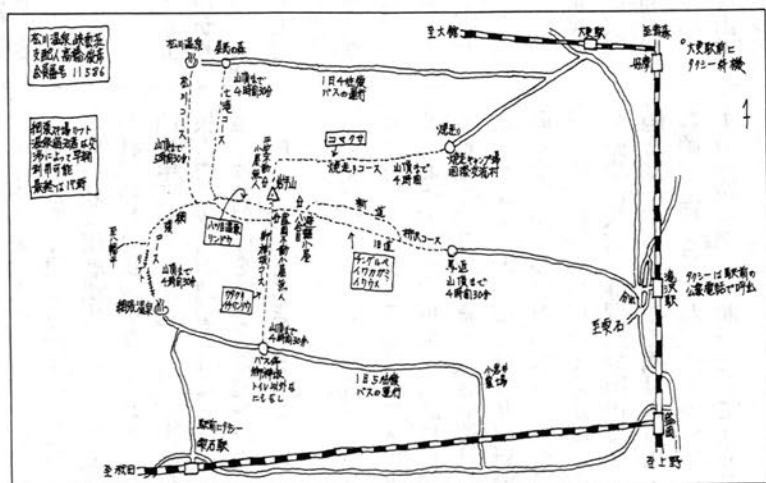
石川啄木

北へ旅する人が盛岡に近づく頃から、車窓の西側に望見する秀麗な山である。

県都に近いのに麓までのアクセスが悪く、頂上域の小屋も夏シーズン短期間しか番人がおらずに無人とな

るので、遠来の方には敬遠されがちであるが、日帰り可能な中高年向けの山である。

御神坂コース春のカタクリ、イチリンソウの群落。それに続く季節は、柳沢コース旧道四七合目のチングルマ、イワウメ、イワカガミの花園、焼走りコース初夏のコマクサの大群落。ハツ目湿原は秋のリンドウと花の山である。



1	コースタイム	一般的登山道は6コースある。登りには山頂まで焼走りコースは4時間、松川コースは5時間30分 他のコースは4時間30分を要する。
2	記 録	下記の参考書籍を参照
3	地 図	国土地理院 (1/25,000地形図) 姥屋敷・篠崎・大更・松川温泉 昭文社発行 エリアマップ山と高原地図、八幡平岩手山秋田駒
4	交 通	柳沢と焼走りコースはJR最寄り駅からタクシーで登山口へ。 網張と御神坂コースは盛岡から網張温泉行きのバス利用。 松川と七滝コースは盛岡から松川温泉行きバス利用。 帰りの最終バスは網張、松川ともに16時55分。 御神坂と馬返には電話がなくタクシーの手配はできない。
5	付近の観光地	焼走り溶岩流 (1719年北東斜面の中腹から流出した溶岩が固まったもので、焼走りコースはその北側に沿って登り、噴出口も確認できる。 八幡平と松川温泉間は樹海ライン経由のバスが連絡しているので百名山を二つ登れる。
6	そ の 他	水：御神坂バス停では補給できない。柳沢コース8合目避難小屋に水場があるが、晴天続きの年には止まってしまう。他に山中で水の補給はできない。 8合目避難小屋には7月中旬から8月は番人がいて毛布を貸し出すが食事は出ない。他の二つは無人小屋である。
7	参 考 図 書	『日本の名山02 岩手山』串田孫一・今井通子・今福龍太・編 (博品社) 1997 (主たる参考文献からの抜粋と文献リストが掲載されている) 『山日和』諏訪弘・著 (自湧社・盛岡) 1996
8	問 い 合 わ せ	中谷充 (会員番号7332) 諏訪弘 (会員番号11009)

報告

REPORT
6月

科学委員会・探検山行

「フォッサマグナ西縁の山の地形を探る」

四月十八、十九日、甲斐駒ヶ岳北東の日向山および深田久弥氏ゆかりの茅ヶ岳登山後、深田祭に参列した。当初は、定員二十五名を予定していたが、日帰りの四名を含めて四十七名の参加となり、急遽、宿を二カ所に分けることとなった。前日は大雨、当日も天気予報では、午後から夕方にかけて雷および雨とのことだったが見事に外れ、新緑の芽吹きのみ、美しい山行となった。

十時五分、JR中央線長坂駅集合。東京方面からの車は、途中事故渋滞で心配されたが、かろうじて到着。車に分乗して日向山登山道入り口へ。宿別に二班に分かれ、緩やかな山道を、途中有井講師による地形の説明

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

を受け、一時間半ほどで標高一六六〇メートルの頂上へ。

頂上は雁が原とも呼ばれ、花崗岩の白い砂(深層風化とのこと)で覆われ、独特の景観を作っている。雲間に甲斐駒ヶ岳が見られ、中央線を挟んで八ヶ岳が遠望された。下山は急な砂の斜面を降り、錦滝を経由して尾白川林道を歩き、元の登山口へ戻った。

フォッサマグナは、幅約一〇〇キロメートル、長さ三〇〇キロメートルにおよぶ本州中央部を南北に横切る地域で、ラテン語で大きい裂け目という意味。西側の境は、北の新潟県糸魚川市↓長野県白馬村↓長野県松本市↓長野県塩尻市↓諏訪湖↓山梨県小淵沢町↓静岡県静岡市に至る線となっている。この線は糸魚川・静岡構造線と呼ばれ、フォッサマグナの西縁を画する断層として知られている。

各宿に荷物を置いた後、長坂駅前の会場にて夕食および懇親会。参加者は、関東を中心に、熊本・新潟・富山・大阪からも。有井講師による補講もあり、楽しいひとときを過ごした。

翌日は朝食後、東京大学宇宙線研究所の奥の登山口に集合。深田記念公園経由からの茅ヶ岳登山と金ヶ岳經由とに分かれ登山。金ヶ岳經由は、有井講師の説明を受けながら後方に南アルプスを望み、金ヶ岳山頂(一七六四メートル)まで約二時間。石門をくぐり鞍部を過ぎて茅ヶ岳(一七〇四メートル)へ。

山頂は足の踏み場もないほどの人数。昼食をとって、下山後深田記念公園にて深田祭に参加。一九七一年登山途中に亡くなった深田久弥氏をしのび、白鳳会・日本山岳会による献花献酒の後、青い山脈の斉唱。順次解散となった。

日ごろ登っている山が何千万年単位で造山され今も動いていることを知り、悠久の時を感じた二日間だった。(丸山修一)

データバンク研究会

山に関するホームページ

昨年十二月に日本山岳会のホーム

ページが開設され、すでに四千件からのアクセスがありました。外国からの連絡や問い合わせはもちろんのこと、海外在住の会員からも、遠く離れた異国の地にて、日本山岳会のホームページが見られるようになり感激した、という電子メールをちゅうだいでいます。

さて、インターネット上で山に関するホームページがどのくらい存在するのか、今回は件数について紹介したいと思います。

まず、インターネット上のホームページを探す検索ホームページとして、『YAHOO JAPAN』

(<http://www.yahoo.co.jp>)と『NTT DIRECTORY』

(<http://navi.ntt.co.jp>)が著名です。これらは、それぞれのデータベースの中から検索語句で検索し、該当のホームページを列挙、その中から一つのホームページを選択するようになっています。そこで、『YAHOO JAPAN』で『富士山』で

検索してみますと二百十六件、北アルプスですと六十二件、同様に登山三百八十九件、ハイキング百二十五件、山岳部五十件、山岳会二十七件、山岳部十五件、スキーになると千九百五十五件も存在しました。これらはすべて詳細な内容とは限らず重複するホームページもあり、日々増加

ネパール観光年記念「JAC ネパール・トレッキング」

1988年11月20日(金)～11月28日(土)9日間

本会では、5月号でお知らせしましたように「ネパール観光年」を記念して「ネパール・トレッキング」を企画しております。往復ともチャーター便を予定しておりますので、費用も一般より安くなっています。グループでの参加、会員の紹介による会員外の方の参加も大歓迎です。

1. 実施時期

1998年11月20日～月28日9日間

2. 航空便

ジャパンエアチャーター／直行便

3. 予定コース

- ・マナスルBCとポカラ
- ・エベレスト展望シェルパの里
- ・ロールワリン山群チョルドンピーク
- ・ランタン山群ヘリトレッキング
- ・アンナプルナ山群展望
- ・ジョムソン・ムクチナート
- ・シバプリー・シャクナゲ植林
- ・他約10コース

*各コースとも会員がリーダーとして同行、グループによる独自計画も可。

4. 費用 25～38万円

*7月号でコース詳細、各旅行代金、旅行条件などをお知らせします。

5. 企画 (社) 日本山岳会

主催 本会指定の下記旅行業者

6. 申込 官製ハガキに住所、氏名、電話番号を記入の上「JACネパール・トレッキング参加希望」と明記し、本会事務局宛にお送りください。

*最終申込は7月末(希望者把握のため申し込みは早めをお願いします)

旅行主催 (株)アトラストレック アルパインツアーサービス(株) ヒマラヤ観光開発(株)

しています。
また、一般のホームページの中には、他のホームページを紹介し移行するリンクコーナーという場所があ

ります。そんなリンクコーナーの中で、自らの登山活動を『新潟からの山旅』(<http://www.dent.niiga-ta-u.ac.jp/restend/okamoto/ok>)

●新ハイキング選書●

●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山

新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中

※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁

川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)

※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13

☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

amotome.html)という題名で紹介している岡本明氏のホームページに、日本百名山や一等三角点などのようなリストが必要な資料コーナーに三十件、ホームページが二百六十件紹介され、さらに山口裕子さんという方のホームページ(<http://kfn.ksp.or.jp/~yuko/climbing/index.html>)には、五百件以上もの全世界のホームページが紹介されています。

逆に検索ホームページにもリンクコーナーにも登録されていない、組織や仲間だけに情報を流す、世間に知られていないホームページも存在するようです。必要な情報だけを書き込み、時には写真や図を簡単に張り付けただけのシンブルなホームページです。これが登山関係でどのくらい存在するのか分かりませんが、他の分野で、組織の中の個人紹介の中で同様な例を見かけることがあります。

いずれの方法を利用しても登山関係だけで膨大なホームページを確認でき、全世界から一瞬にして届く情報を整理することにより内容の濃い情報になるのではないのでしょうか。

(遠山元信)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

火山性有毒ガス事故防止のための安達太良山の登山規制

小荒井 実

昨年の九月に火山性有毒ガス・硫化水素によって四名が死亡する事故が発生、火山ガス災害への対策が急務となっている。

安達太良山は現在も火山活動の活発化が観測されている。第三回福島県火山性ガス安全対策協議会が去る三月二十三日に開催されて、事故防止の上から次の登山道が規制される。沼ノ平への入山禁止。昨年の事故は沼ノ平で発生している。

・くろがね小屋から鉄山へのルートは登山禁止。鉄山南面にガスの噴出が観測されて危険である。

今後の観測で火山性ガスや火山活動が鎮静化すれば登山規制は解除さ

れるが、いつになるかは不明。

なお、登山規制の広報や安全対策など早急に推進することになった。

火山ガス災害防止のための委員会の設置が科学技術庁で行われるという。ぜひ事故防止のマニュアルを作成していただきたい。

活火山の多い国に住む私たちは、温泉の恩恵に浴して多少の硫黄の匂いなど気にしない国民性を持っている。もう少し有毒ガスに敏感な感覚を持つべきと思っている。

「大島」の山巡り

中村太郎

北九州、八幡の畏友吉村健児さんの驥尾に付し、宮崎県の最南端に位置する大島の山に登ってきた。吉村さんは、深田百名山を登頂した後、

今度は目標の一つに、「大島」の山巡りを掲げられた。ピークコレクトを楽しんでいる小生にとって、登った山数をふやすのにもってこいの企画なのである。

手始めは、昨年奄美大島の山登りからであった。この島には、湯湾岳(六九四メートル)の他、湯湾岳をふくめて一等三角点の山が四座あった。ついでに、請島で一つ、喜界島で二つの一等三角点を訪れることができた。

山中で、お目当てのアマエビネの花を見つけた。山径を、普通のイノシシより小型とはいえ、アマミノシシがとことこやってきて、お互いにびっくりする。野生化した山羊の大群が駆け抜ける。名物のハブに出合わなくて幸いであった。

本年の皮切りの大島詣では、山名が「山の神」、点名が「大島」、標高二〇六メートルの山であった。この大島は、一九九三年の資料によると、周囲九・五キロ、三十一世帯、四十九人が居住しているとある。ところが、現在では人口が二十人を割ってしまったそうである。南郷町の役場から連絡をとってもらったので、船着き場まで島の区長さんが、軽自動車を迎えにきてくれる。小学校跡に建てられた瀟洒なアドベンチャーキャビンに立ち寄り、今晚はここに泊

まることになる。この施設は自炊とはいえ、研修に、マリンスポーツに、島内の散策に利用されているとのことであった。清潔で、海の眺めがいい。

さて、山の神登山。天気は快晴である。区長の車に乗せてもらい、車から降りると、区長が山刀を振って先導してくれる。区長の案内がなかったら、少なくとも林道から山径への入り口は探すのが大変だった。多謝。吉村さん、同氏の女婿蔵富さん、私が後に続く。かろうじて踏み跡とおぼしきかつての道があるが、まるでジャングルの中を登って行くようであった。六合目ぐらいまでたどりつくくと区長さんが「頂上までじきですよ」と、山刀を吉村さんに渡し引き返された。じきのはずが、頂上まで小一時間かかった。

頂上には、三等三角点があり、木の間もれに海が見える。どちらを向いても海が見えた。その昔、頂上には、島の氏神様を祀った神社があり、お祭りには島の人たちが神楽を奉納し、賑わいを見せたそうである。

その頃は、頂上、山の神までは段畑があった。戦後間もなく畑はあきらめられ、杉の木が植林された。今では見事な杉の木に育っているが、伐採する人はいない。

帰りに、林道で一人の老人と立ち

話をする。

「山の神さんに行ってこられたか。荒れていて大変だったでしょう。山の神さんは、この先の下にお移したので、何年も頂上に行った人はいないはずですよ」

土地の言葉なのでよく解らなかったが、要するに、こんなことを言ったものと思う。

宿泊所が自炊なので夕食はどうするのかと案じていたら、海の方の南郷町の仕出し屋から立派な折詰が出前された。船による出前も乙なものである。区長から差し入れられた焼酎を三人で二升、ペロリと平らげた。

翌日、青島で開催された日本山岳会「九州四支部の集い」に出席する。いいお話を聞き、いい写真を見て宮崎県中の焼酎を片っ端から頂戴し、いい一日を送った。翌々は、双石山登山、宮崎支部長大谷優さん、支部の皆様方に引っ張りあげられ、やと名峰双石山に登ることができた。明日から、吉村さんのお供をして、宮城県の大島の山に登りに出かける。

パプア・ニューギニアの山旅

川越尚子

一九九八年二月七日未明、パプア



・ニューギニアの最高峰ウィルヘルム山（四五〇メートル）に登頂のため関西空港を飛び立った。パプア・ニューギニアといえば、かつて第二次世界大戦の激戦地であったところだ。現在では「地上最後の楽園」、「地球最後の秘境」ともいわれ、極楽鳥などが生息し、色鮮やかな珍しい蝶が数多くいることでも有名だ。私たちは朝から蒸し暑いポートモレスビーで国内線に乗り換え、島の中央部ハイランド地方のマウントハーゲン空港に降りた。

三千メートル級の山々が連なり、山あいには小さな集落が点在する。涼しく比較的過ごしやすいため、多くの民族が住む。この国全体では二百を超える文化が混在し、七百以上の言語が話されているそう。小さな集落ごとに言語が異なるという。公用語は英語、部落間の会話はビジン語だそう。

岩峰を抜けてウィルヘルム山へ

ここからさらに奥地の登山基地ケグルスグールに向かう。人々は皆こざっぱりとした服装であるが、ほとんどが裸足だ。そしてほぼ全員がビルムという手編みのズナ袋をさげている。幾何学模様や縞模様など色鮮やかで、どれ一つとして同じ模様がない。基地の建物の周辺は、数戸の茅葺き高床式の家と、タロイモで

あろうか里芋のような畑が花と同居している。

翌朝、晴れ渡った青空のもと、ガイドとポーターとともにビュンデイクの小屋に向かう。水量の多い、流れの急な川の丸木橋を渡るとジャングルである。昨夜の激しい雷雨のためか、登山道はぬかるみ、歩きにくい。珍しい、可愛い花を見つけた。ポーターに花の名前を聞くと、「フラーワー」という返事が返ってきた。おもしろいところが嬉しい。約五時間かかってたどり着いた山小屋は、静かなビュンデ湖の畔にあった。湖の奥に真っ白い滝が数条見える。

高度順応のため一〇〇メートルほど標高の高いアウンデレイクまで往復する。ビュンデレイクは明るくおもしろい湖だが、アウンデレイクは濃い緑に覆われた深く重厚な感じのする湖である。意味を聞くと現地語でビュンデは女性、アウンデは男性

という意味だそう。

翌朝零時起床、軽い食事の後、ヘッドランプを頼りに暗闇の中を出発する。山の夜明けは神々しく美しい。東の空が白み、間もなく薄紅色に染まっていき、雲の間に柔らかな曙光が輝き始める。灌木帯を過ぎると岩峰の連続である。本峰の前に四つものピークがあり、大トラバースをしなければならぬところがある。いつまでたっても本峰が見えない登りは辛い。最後のピークを巻くと、やっと谷を隔てて本峰が現れる。岩をよじ登って狭い山頂に到達し、三六〇度の展望を満喫した。

翌朝ケグルスグールの基地から十人

ネパール・ヒマラヤ・トレッキングのタベ

ビデオ上映会とトークショー 18:30～20:30
東京 ●7/7(火) 退職金機構ホール
(港区芝公園1-7-6、芝パークホテル並び)
名古屋 ●7/9(木) 名古屋国際センター4F 第3研修室
(中村区那古野)
大阪 ●7/9(木) ミズノ本社B1ネクスステージ
(住之江区南港北1-12-35)
福岡 ●7/3(金) 都久志会館大ホール
TEL.092-741-3335(定員600名)



運輸大臣登録旅行業第490号 / 日本旅行業協会正会員

パプア・ニューギニア株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

乗りの小型機で空路マダンのリゾート地まで飛ぶ。約四十分のフライトは、熱帯雨林の生い茂る山並みを間近に見下し、何本も蛇行する川に沿って点在する部落を確かめ、気持ちのよい空中散歩であった。川は茶色で濁っていたが、ところどころに見られる湧水は、上空からも底が見えるほど澄んでいたのが印象的であった。

マダンでゆっくりと休み、さらに奥地の部落へ行く。酋長が森の中を案内してくれる。樹林の中の集落には、見事な大木がピンクの花を満開にしていた。カカオの木には大きな実がたわわに実っている。年二回の収穫があるとのことだ。畑には豆類、タロイモなどが作られている。人も犬も猫も鶏も、贅肉一つない最小限ぎりぎりの肉体ではあるが、森の中を歩き回り、子供たちは何一つ身にまとわず、しかし明るい表情であったのが深く心に残る。

今回は登山もさることながら、この国の文化のほんのひとこまを垣間見ることができ、また現地の人々と触れ合うことができたことを嬉しく思った。

帰国後、「日本が消したパプア・ニューギニアの森」(清水靖子著、明石書店)を読んだ。彼らにとって森は宝の泉である。森を大事に育み、

森の幸を利用し、豊かな川を生命の泉とし、先祖代々豊かに暮らしていた。

戦後、オーストラリアが委任統治を行うようになってから、島の豊富な資源に注目し伐採権を取得する。

日本の大手企業も大々的に開発に乗りだし、長年続いた豊かな森はあっという間に裸にされ、土地は痩せ、川は濁り干上がっていった。先祖代々からの土地、森、食べ物、薬草など生命線を断たれ、しかも、その代償もほとんどない現地の人々の嘆きと怒りが、私にも伝わってくる。森の悲鳴も聞こえてくる。森の木はチップになって日本に送られ、段ボールの中芯になっている。

文化生活も、近代産業改革も決して悪いことではないが、自然を壊さない、森を奪わない生き方を私たちが真剣に考え、模索していかなければならないと切に思う。

『樹林の山旅』について

山本健一郎

名著の誉れ高い森本次男さんの「樹林の山旅」を手に入れたのは中学生の時だった。アーサー・シモンズに傾倒しておられた森本さんは、

朝史門というペンネームで、「山と漂泊」という本も出されていたが、この二冊が近所の古本屋に並んでいたのを見つけ、森本さんについての知識は何も持ち合わせないまま買ってしまった。ところが読み始めると私はたちまち「奥美濃は関西の隠れた山岳地帯である」に始まるこの本の虜になってしまった。「人知らぬ谷々」の「川は地塊の血管である」という書き出しも新鮮なものに思え、

『国境の峠』の「私は私の山旅を樹林の山旅と呼ぶ」に感銘を受け、『黄蘗の村』の「みなかみは川の秘密である」、「行ってごらん、行ってごらん、そこに何があるか、行って探ってごらん」を暗誦しながら西丹沢の沢を歩いた。そして遠く奥美濃の山にあこがれていた。

この本を手に入れて五十年が過ぎようというこの頃、ようやく機会を得て能郷白山に登ったり、雪の石徹白を訪れる機会を得たが、その間に何度この本を読み返したことだろう。

昨年京都の芦生の森を訪れる途中、同行していただいた方から、この辺に森本先生の山荘があり、亡くなられた後も先生を慕う方々の手で小屋が維持されていたという話を聞かされ、今でも森本さんの人気は関西の山の方たちの間に根強く残っているのに感銘を受けた。そして「樹林の

山旅」を珍しく神田で見掛けたと話したら、手にいれてほしいと言われ、帰京後直ぐにその店に行ったらもう売っていたし、阿佐ヶ谷に行ったときに、穂高書房をのぞいたが見当たらなかった。今でも、この本の魅力は衰えないらしい。

ところが先日近所の本屋で「樹林の山旅」なる本を見つけた。この本が再版されるとは素晴らしい、奇特な出版社があるものだと思いつたら、何と著者名が違うではないか。何て恥知らずな奴がいるんだと、中は読まずに棚に戻したが頭に血が上ってきた。この頃駆け出しの著者では、この名著の存在を知らないかもしれないが、山の本の出版社までが知らないでは済まされない。本の内容の盗作は法により禁じられているけれど、題名を盗むのは禁じられていないのだろうか。

それにしても法律によって著作権を保護され、利益を享受している出版社や著者がこんなことをすれば、自分の首を絞めることになるということが分からないとは思議である。こういうことを許せば、そのうち本屋の店頭には「山の想ひ出」、「山行」、「霧の山稜」、「本のある山旅」などという題名の新刊書が並ぶようになるのではないかと心配なので、敢えて苦言を呈する次第である。

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

荒賀憲雄・著

『落日の山』

本書は登山家であり詩人である著者が、山の詩集『霧の中に』に次いで世に問うた本格的な詩文集である。序文で梅棹忠夫氏が言っているように「ひとつひとつのことばがえらびぬかれ、みがきぬかれたもの」。美しい文章と詩である。読者を深く詩の世界に誘ってくれる。

内容は三部からなっており、第一部は「落日の山」で十七篇の文字通りの詩文集である。一篇の詩とその文章の背景は、若き日の山の思い出の思索が多く、舞台も京都・北山であり、妙高山麓、北海道と全国各地におよび、著者の山歴の深さがうかがわれる。第二部は「山の詩」論。著者の自論「行動」と「ひらがなが

き」の詩論を展開し、現代詩の危機を訴える。第三部は「山のことは」。大島亮吉を始めとする二十人の著名な詩人を登場させ、著者の豊かな人とことばの出会いが記されている。

それにしても『落日の山』とは気になる題名だが、著者の年齢からの体力の衰えより、私はあのとえようもなく美しい羅臼平の落日の感動からと受け取りたい。(小倉 厚)

一九九八年三月 ナカニシヤ出版
発行 二二九ページ 二千五百円

本多勝一・著

①『五五歳のときに登った山』

登った山』

②『六〇歳の記念に登った山』

登った山』

本書二冊はジャーナリスト本多勝一の山岳紀行文集である。日本各地の山や海外の山を楽しみながら観察と発見の山登りで、ページをめくると新鮮な山の世界が広がっている。著者のスケッチと写真も楽しさを添えるルポルタージュに満ちた紀行文である。

三十年ぶりに再挑戦したパキスタンのシャハーン・ドク。「個人的には一種『創造的』ともいえる登山」となったマゼラン海峡を臨むターン

山。鳥や花や樹木などと遊んだ山々など三十の山。どれも五十歳から山登りを再開した著者の、山への落ち着いた愛情と探求心にあふれている。そして利得のために山を破壊する力に対しては断固とした批判をしている。(三栖寿生)

①一九九七年八月 朝日新聞社発行 二二四ページ 二千円
②一九九七年七月 柳悠々社発行 二五六ページ 二千三百円

小浜浩三・著

『妻と二人の山歩き——五十歳からの初めての山』

著者は千葉大山岳部OBで、一九六三年にナンブルール登山、一九七一年にはマカルーII峰の登攀隊長。その後も山岳部監督を務めたベテラン。その著者が五十歳になってから、奥様への罪滅ぼしをかねて、夫妻で山歩きをはじめた。

本書はこの十年ほどの間に登った山の中から、九十座を選んでその記録をまとめたものである。東北から九州までの山を九つのブロックに分けて収録している。

これらの山に出かけた動機、山名由来、山群の中での特徴、アクセス、展望、コース上の注意点、花などの観察、山行後の印象、本書を見て出

かける人へのアドバイスなど、行き届いた内容である。

どの山の項を見ても、選ばれた山をたたえる気持ちを感じられ、時を忘れて引き込まれてしまう。

過去のヒマラヤ登山で、総隊長の沼田真先生から教えられた、エコロジカルな山への接し方、山に対する心構えが、自然に身につけているからかも知れない。数ある類書の中で、ひと味違った登山の案内書として、平均年齢五十七・五歳の会員諸氏におすすめする。(松田雄一)

一九九八年三月 光人社発行 二一四ページ 千七百円

『日本の名山』

シリーズ全二十巻

別巻四巻(既刊十八冊)

書名は全国二十峰の山の名前からなっているが、一般の登山ガイドでなく、古今東西あらゆるジャンルの人たちの「名山」に対する想いが詩歌や小説、随筆、研究文などとなり、複数の編者によって選ばれて本書となっている。

読者にとって、こんな見方、とらえ方、と感嘆・啓発されることとなる新しい本である。(三沢二三)

一九九七年一月より毎月 博品社発行 各巻千六百元

ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力をお願いしたところ、多数の方々からご応募をいただきました。会報に逐次ご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略) 450名/1097口/5,489,009円(5月7日現在)

江 伊藤寛志 崔蓮任 田山勝
奥原教永 俵山守男 島尾久子
谷口元 木本義雄 椿居澄子
増山武雄 上田景子 小林延子
熊谷とも子 柳下棟生 杉田さ
かえ 矢野弓之介 喜熨斗政夫
小松忍 奥谷潤之輔 中村直樹
後藤三男 増田欣子 石沢好文
金森繁三郎 岡本丈夫 加藤節
子 森武昭 小田知枝 小田稔
佐藤正樹 高井延幸 池田真由
美 高遠宏 澤井貞夫 森川茂
樹 村木富士 東原進 戸屋正
俊 松原六郎 中島道郎 大橋
基光 横山厚夫 鈴木耕治 大
谷亮 田村嘉男 丹羽一喜 中
沢公正 坂本観晃 青木枝朗
横山隆 加納巖 三宅健治郎
国武高 村上直温 鈴木昭 磯
野剛太 倉持内武 山下京子
竹内研一 松澤博志 湯浅充泰
三溝関治郎 古川良雄 滝和美
伊藤一之 望月照夫 早田道治
高橋達雄 山本光二 徳永恒夫
竹中敏郎 秋野子弦 徳倉廣治
姫野和記 蓑原重夫 福森利明
常盤峻士 田中洋子 佐藤映子
佐藤和志 末岡睦 剣持潤四郎
関塚貞亨 藤井正彦 横田和男
奥田晃司 小宮京子 吉田紘臣
山本利伎 子 松村隆広 住吉
仙也 吉永孝行 阿部郁夫 高
橋俊彦 浜口欣一 藤井保 井
口正男 木崎甲子郎 奥野正亥
太田浩史 中野武司 窪寺健之
小倉董子 塩原國隆 溝部忠増
田鎖寿 松田和弘 吉川暢一
蔵富幸夫 新妻徹 牛木素吉郎
瀬川忠四郎 平田大昭 河村栄
二 広谷光一郎 大野洋治郎
池場孝昌 丸山博光 小田島博
北島光子 斎藤恭右 藤崎昌美
トヨタ自動車(株)山岳部 野田憲
一郎 小林伸好 佐近丸彦 田
中清 久保田宣夫 丹生光明

雄 橋村一豊 長坂博 尾上昇
牧野衛 青野興喜 鈴木羊三
一谷恭次郎 織田伸治 正橋剛
二 池田知幸 中祖博司 雨宮
宏光 村井葵 浜崎一成 野沢
豊 中川喜久雄 吉田宏 石澤
六郎 古川利雄 川田善朗 近
藤昭 中川智康 石川保 山田
哲郎 市川次良 轡田隆史 赤
羽昭夫 山本宗彦 山口京一
遠藤靖彦 赤羽孝一郎 斉藤チ
ヨ 滝根正幹 熊田宗次 小林
英雄 梶田民雄 大田祥子 五
十嶋一晃 飯野亨 久木義雄
中村武久 丸尾祐治 内藤俊夫
奈良原町子 三枝礼子 高橋通
子 河野長 竹田寛次 田村扇
一 西原幸子 小島千恵子 戸
村健児 桜井善志 近藤暉 河
合文恒 安藤文子 塚原道夫
丸茂キクエ 下起始 上野康二
間瀬泉 高橋三郎 浜田文二
相澤増平 田川芳子 出来田耕
介 小田眞道 藤井公博 立花
幹雄 及川迪靖 栗野修一 菊
池俊彦 三宅信義 小島豊 星
野辰雄 麻生国雄 深川安明
斉藤桂 山本良三 武田峯生
網蔵卓爾 大庭貞江 長嶋正浩
橋本讓二 神部一男 鈴木敬吾
(計4口) 伊藤寿男 浅井秩夫
島村一男 島村チヨ 涌井鋼一
金田貞男 柏瀬祐之 小宮山稔
佐藤弘 安間莊 小西利雄 森
修作 草木陽一 山岸信夫 桑
田結 林辰夫 薬師義美 平木
清一郎 松本良 長田健三 重
村伝平 松野賢珠 田中昭男
下田泰義 千石信夫 菊池修身
工藤光隆 水沢富一郎 浅原健
蔵 小須田喜夫 山口斌 大森
弘一郎 藤平正夫(計4口)
朝倉英子 飛田彰 甲斐良治
河野孝弘 松田孝一 長岡昭雄
長岡五百子 大里祐一 山下静

- 100口 (500,000円)
日本大学体育会山岳部・桜門山
岳会
- 20口 (100,000円)
橋本龍太郎 吉村健児 平野紀
子 慶応義塾体育会山岳部 橋
本勝
- 10口 (50,000円)
吉村公一 津田文夫 長百合子
鯨坂青青 湯浅道男
- 8口 (40,000円)
日本山岳会図書委員会
- 7口 (35,000円)
齋藤敏男
- 6口 (30,000円)
宇田川芳伸 竹内哲夫 若林啓
之助 田邊壽 重廣恒夫 中島
寛 二塚謙三 阿部和行 長谷
川昌美
- 5口 (25,000円)
木下是雄
- 4口 (20,000円)
泉尾忠 鹿野勝彦 柿崎謙介
小寺佳美 長尾悌夫 高橋妙子
東浜義男 朝比奈英三 小倉茂
暉 渡辺兵力 伊達篤郎 日本
山岳会丹水会 井上信 高田允
克
- 2口 (10,000円)
中谷充 渡邊雄二 末廣担 野
島幹郎 木皿謙 石田要久 岡
田光行 中村純二 麥倉啓 古
田寛昭 照内豊 芦原孝治 関
孝治 山本一夫 古市進 原利
恵子 岩井胤夫 松本吉春 菊
池武昭 内田勇 西田進 福光
正行 池田澄 川津鐵禮 北原
秀介 村川八重子 笠原宏
中村明治 鍋木昇 原徹 牧野千
歳 大久保春美 井古田忠男
山口武夫 遠藤光男 秋山知也
小倉厚(計4口) 山田孝八郎
並木佐吉 金子浩 荒木浩二
和田光弘 秋山宏明 山野井武
夫 中沢仁 新田隆三 三輪利

奥村一郎 境野俊男 久世実
久世邦子 松原尚之 小原晴子
岩崎恒雄 ツツ石清 二木節夫
鈴木茂三 相山之良 廣瀬誠
安立勝重 高橋治 堀越征一
堀越淑子 長谷川清 中島雄三
鳥橋祥子 中村一雄 岩館公子
森谷昭男 松尾良久 高木志茂
子 辻章行 村田逸男 古川文
男 内海孚 飯村富彦 鈴木章
井後幸太郎・道子

●その他

宮原岳子 成合玲子

セツ子 大谷優 堤甚五郎 佐
藤彌右衛門 田中淳子 黒沢孝
藤本三樹雄 尾藤昭二 宮崎和
夫 石井由紀 野田三郎 大和
田卓 田原善治 小川重蔵 三
嶋隆英 坂井久光 有木功 渡
邊久 渡辺敏夫 佐野孝 沼賢
亮 清水芳彦 高田誠 京都大
学医学部山岳会 三上忠人 中
山健 宇田川允敏 山城貞雄
木本慶太郎 木本礼子 廣瀬一
隆 上北睦子 上北和夫 秋山
正人 秋山征子 菴谷利夫 渡
邊玉枝 森本市郎 小林正彦

宮森実 宇野寿恒 服部裕 (財)
植村記念財団

●1口 (5,000円)

森宏子 高橋詢 関口雅義 吉
武正子 嶋田晃一郎 田村佐喜
子 広瀬幸寛 菅野時子 大関
保 黒澤満 野口いづみ 岡部
みち子 大野力彌 國見ゆみ子
武井清 鈴木勝彦 井上保 名
越昭男 西尾俊子 四方宗和
藤内英夫 伊豫田滋雄 長尾登
之助 鴨下重彦 湯川龍二 白
井慎 斎藤英子 堀川浩 高倉
信孝 荻野昌宏 小笹孝 大谷

図書受入報告 (1998年4月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
西尾寿一	蒼山遊溪	218pp/19cm	ナカニシヤ出版	1998	著者寄贈
ウィグノール(著)三浦彌子(訳)	ヒマラヤのスパイ: Spy on the Roof of the World	438pp/20cm	文藝春秋	1997	出版社寄贈
西丸震哉	机上登山	253pp/20cm	博品社	1998	著者寄贈
雪嶺会(編)	雪嶺: 雪嶺会45年の記録	255pp/26cm	雪嶺会	1997	発行者寄贈
山と溪谷社(編)	マイカー登山 [東名高速道]: 高速道路で行く山登り	126pp/21cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
浅野孝一	樹林の山旅: 関東・甲信・南会津の山歩き	213pp/20cm	実業之日本社	1998	出版社寄贈
根深誠	北の山里に生きる: みちのくの自然と人生	213pp/20cm	実業之日本社	1998	出版社寄贈
谷口凱夫	アルプス交番勤務を命ず: 元富山県警察山岳警備隊長の遭難救助30年	254pp/19cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
河口湖美術館(編)	回顧・足立源一郎展	187pp/27cm	河口湖美術館	1998	発行者寄贈
羽賀一蔵	越後佐渡の峠を歩く	311pp/21cm	新潟日報事業社	1998	著者寄贈
羽賀一蔵	峠をあるく: 落穂ひろい	151pp/21cm	羽賀一蔵(私家版)	1998	著者寄贈
今井通子	山は私の学校だった	261pp/20cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
叶内拓哉 他	日本の野鳥(山溪ハンディ図鑑 No. 7) 日本で見られる野鳥479種	623pp/21cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
山梨日日新聞社編集局(編)	山梨百名山	213pp/22cm	山梨日日新聞社出版局	1998	出版社寄贈
不破哲三	私の南アルプス	245pp/22cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
日本山岳会・富山支部(編)	山岳: 日本山岳会・富山支部創立50周年記念誌	159pp/26cm	日本山岳会富山支部	1998	発行者寄贈
平林克敏	熱き心: 登山と企業から学んだ私の人生哲学	276pp/20cm	ぱるす出版	1998	著者寄贈
静岡新聞社出版局(編)	静岡県の山50選	120pp/21cm	静岡新聞社	1998	森博氏寄贈
芝浦工大山岳部・OB会(編)	新疆の太陽と風と山: '97 芝浦工大ムスターグアタ峰学術登山報告書	130pp/26cm	芝浦工業大学山岳部	1998	発行者寄贈
広島山の会(編)	伯耆大山天狗沢事故報告書1998. 2. 22	29pp/30cm	広島山の会	1998	吉村千春氏寄贈
綿引英俊	フリークライミングの真髄: 誰も書かなかった教本	207pp/19cm	東京新聞出版局	1998	出版社寄贈
沼田市立図書館(編)	沼田市立図書館「尾瀬・森林文化関係資料目録(1998. 3)」	559pp/30cm	沼田市立図書館	1998	発行者寄贈
平山郁夫・谷久光	平山郁夫の文化財赤十字	229pp/22cm	芸術新聞社	1997	著者寄贈
Shoumatoff, Nicholas (eds.)	Around the Roof of the World	237pp/24cm	Michigan Press	1996	購入
Mantovani, Roberto	Everest: History of the Himalayan Giant	144pp/37cm	OM Book Service	1997	吉永英明氏寄贈

会務報告

【四月理事会】

日時 四月十六日(木) 十八時三十五分～二十一時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 斎藤会長、小倉、竹内各副会長、吉永、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯉坂、森、大蔵、宇田川、宮崎各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、中川、平野、中村各常任評議員

〔委任〕 大森副会長、田邊、増山、坂本各理事、長尾常任評議員

【審議事項】

① 平成九年度収支決算および事業報告の件 吉永

平成九年四月一日から十年三月三十一日まで (別紙説明資料) 承認

② 監査の件 石橋監事

平成九年度会計関係書類、事業報告、理事会活動および運営について監査の結果、概ね良好と判断する。引き続きの努力を求める。承認

③ 秩父宮記念賞の件 竹内副会長

三月二十六日、第二回有識者懇談会開催、審議の結果「秩父宮記念賞」実施大綱(案)として①目的②名称③表彰の対象④運営委員会設置、

までを総会提出議案として承認を受ける。のち審査委員、事務局を設置し本年度の実施活動に。承認

④ ネパール・トレッキング 吉永

四月七日、旅行業者と打ち合わせ会議開催、実施要綱が決まった。

① 実施時期 一九九八年十月下旬～十一月月上旬(八～十日間)

② 航空便 往復ともチャーター便によるカトマンズ日本直行便

③ 予定コース クリーン地域、ローリワリン地域、ランタン地域、アンナプルナ山群、マナスル山群、カトマンズ・ポカラ周辺(五ハコース)

④ 費用 二十五～三十八万円(会員特別価格)

⑤ 企画・(株)日本山岳会 主催・本会の指定する複数の旅行業者

⑥ 申込方法 官製ハガキに住所、氏名、会員番号、郵便番号を記入の上「JACネパール・トレッキング参加希望」と明記して本会事務局宛に五月二十五日までに送ること(最終申込は七月末日を予定しているが、希望者数把握のため早めの申込を要望する)。*「山」六月号でもコース、費用などを知らせる。

⑦ 会長の発起人加盟の件 絹川

本会斎藤会長に「京都芦生の森」のユネスコ世界遺産登録発起人加盟の要請が地元委員会よりなされた。

(「山」二月号参考) 承認

⑥ 議事録署名人の件

四月理事会議事録署名人 勝山康雄、大蔵喜福 五月総会議事録署名人(予定) 宮崎紘一 藤田礼子

【委員会報告事項】

●総務委員会・絹川

① 評議員会を四月二十五日開催、十四名出席(欠席委任届四名) 総会は五月十六日(土) 十四時より東京グリーンホテル水道橋で開催。

② 中国登山協会へ五月八～十日、斎藤会長、大森副会長、吉永、伊丹各理事が表敬訪問として訪中する。

③ 新規採用予定の事務局職員は面接選考の結果、森田美恵子さんを採用

四月二十日より勤務。

④ 北海道支部長は野田四郎会員より新妻徹(会員番号五八六八) 新支部長に交代。

⑤ 東海支部総会(五月三十日) に大森副会長の出席要請があった。

⑥ 岐阜支部事務局担当者が高木基揚会員より堀義博(会員番号一一七〇七) 会員に交代。

●集會委員会・勝山

中高年会員の増加とその対策として講座や山行企画を会報に紹介し、自己防衛知識の吸収とクラブライフを豊かにするため「夏山を満喫するために」と題して講座を開催する。

第一回「メディカルチェックのすすめ」 六月十二日 十八時三十分

於本会ルーム 講師・大森副会長 第二回「筋力アップとストレッチング実技」 六月二十一日 十三時 於法政大学市ヶ谷体育館四階 講師・スポーツジム女性若手インストラクター。

●ネパール国際山岳博物館建設募金委員会・伊丹

現在応募額二百二十八万円、各委員会に対しては総会通知状に振込用紙の同封をお願いしている。免税についても努力進行中であり、各理事にも委員会での善処をお願いする。

●青年部・宇田川

カンチェンジュンガ登山隊一九九八の現地通信では、三月二十二日より毎晩のように雪が降り、苦勞しながらも三月二十九日には全員BCに入った。高度にも慣れ、全隊員が元気に四月一日より登山活動を開始。

●指導委員会・熊崎

四月十二日、北アルプス樺池の神ノ田圃早大ヒュッテをベースに、中・上級者対象山岳スキー研修会を開催。講師四名、研修生十七名(一般会員六名一六十歳以上二名、現役大学山岳部員六名一女子部員一名、会員外五名一大学山岳部若手OB二名、社会人山岳会会員四名) が参加した。連日好天に恵まれ、白馬岳登頂をはじめ、雪崩判断、埋没者救助など危急時対策を中心とした所定の

さんけんだより

新管理人奮闘記

その1

山研運営委員会
山研管理人・木村太郎

まだ先のことと思っていたのに、ついにはその日はやってきた。半年間必要な衣類や書物、当面の食料などで満杯となり、バックミラーには段ボール箱しか映らない車で上高地に向かったのは四月二十四日の夜中。

明け方のサーブエリアで山研委員会の皆さんの車に合流、何となく安心して、いざ上高地へ。

早朝山研に着くと、早速施設内の掃除に取りかかる。委員の皆さんは要領よくテキパキと動き、山研はそのたびに少しずつ長い冬眠から目覚めて行く。同時に「ここ

で暮らすんだナ」という実感も少しずつ湧いてくる。委員の方と一つずつ確認するような感じで、開所の準備は終わった。

二十七日に開所して二日目、最初の利用者が見えた。マニュアル通りに何とか……なったようだ。そして恐怖のゴールデンウイークがやってきた。五月一日七名、二日は四・パティー十九名、三日も十七名の予約。部屋割りはどうしたらよいのか、頭がパニック状態。ところが二日朝、山研の理事と委員一名が新米管理人の助っ人として上がってきてくれた。百万の味方！利用者の皆さんも何かと協力的で、助かった。

三人で水道工事、電気工事、設備点検と、私たちにとっての連休は工事の毎日。そして最初のハプニング。二日の朝、水道の蛇口をひねると濁り水。昨日夕方から降り出した大雨の影響だった。大変だ！

研修をすべて消化することができた。

●自然保護委員会・大蔵

東京Outs「市民の祭典」の後援義使用依頼については、三月二十四日の本委員会専任事項として以下の条件付きで承認した。

実施日①富士山会場 七月三〜五日

②東京会場 十月六〜十二日

条件 広報、ポスター案内等掲示には後援者名を略さずに明示すること。(社団法人日本山岳会自然保護委員会または(社)日本山岳会自然保護委員会)

●第九次マッキンリー気象観測機器

設置登山隊一九九八 登山隊長大蔵

日程 九八年五月二十六日より二十四日間

目的 デナリパス上部五七一五メートル地点の自動観測機器の保守、設置、マッキンリー山の登頂、高所、気象のほか、総合的な高所登山の訓練実施。

登山隊メンバー 各大学山岳部現役OB、五十歳以上(一名)の本会会員等全十名。

●マッキンリー気象観測機器設置登山隊の終了にともなう今後の諸問題プロジェクトリーダー・大蔵喜福①一九九〇年に始まった本登山隊は来年第十回を数える。当初の目的を達成できたと思えるので来年度をもってこの計画を終了する。

②収集したデータは分析し、アラスカ国立公園局(デナリ)に毎年報告している。

③設置した機器は撤収が条件だったが、アラスカ大学フェアバンクス校に建設中の「国際北極圏研究センター」(九九年発足)より、地球規模で気象などを観測する定点としてマッキンリー五七一五メートルの観測機器設置点を利用したいとの協力を要請された。

④マッキンリー登山は以後学生ほかの総合的な高所登山の訓練および育成のため、学生指導委員会に引き継

ぎをお願いしたい。

◎小暮眞望会員より寄贈申し入れがあった日本百名山シルクスクリーン版画「上高地」ほか三点が本席で披露された。

ルーム日誌

4月

1日 指導委員会
2日 山げらの会 山学研 会報編集委員会
3日 フォトビデオクラブ
6日 総務委員会 自然保護委員会
7日 アルバインスケッチクラブ
8日 常務理事会 93同期会
9日 学生部 高所委員会
10日 総務(面接)

13日 アルバインスキークラブ 図書委員会
14日 二火会 アルバインスケッチクラブ 青年部 95同期会
15日 三水会 会計監査 山研委員会 97同期会

16日 理事会 科学委員会 学生部
18日 フォトビデオクラブ
20日 総務委員会 資料委員会
21日 自然保護委員会 フィルムビデオ委員会 学生部
23日 集委員会 学生部
25日 評議員会
27日 緑爽会 4月来室者546名

INFORMATION



◆気象講座「夏山気象入門」

科学委員会

昨年に引き続き、夏山気象講座を企画しました。夏山気象の入門編として、夏山気象の見方など基礎的なことのほかに、今年の夏山の気象の予測についても話していただく予定です。

日時 七月十六日(木) 十八時三十分

二十時

会場 日本山岳会集会所

講師 奥山巖氏(日本気象協会 科学委員会委員)

問合せ先 北野忠彦

TEL・〇三〇一〇四一六一八九

◆秋の草花を訪ねる箱根湯坂路ハイ

97同期会

都会の残暑から抜け出し、初秋の箱根路で山野草と親しむ、97同期会全体としては初めての親睦ハイイクです。自然観察指導員のご協力をいただきフィールドガイドをお願いしま

した。

日時 八月二十九日(土) (前夜天気予

報の降水確率が四〇パーセン

ト以上なら中止)

集合 小田急線箱根湯本駅前九時

参加費 五百円

行程 箱根湯本駅―畑宿―鷹巣山―

浅間山―湯坂山城址―箱根湯

本駅(行程約三時間三十分)

ハイイク後、箱根湯本の温泉で

懇親会を予定(会費五千元く

らい)

申込 ハガキに①ハイイク参加②懇親

会参加③両方参加を明記の上

八月十日までに日本山岳会事

務局・97同期会メールボック

ス宛ご連絡ください。

問合せ 池谷健

TEL・〇四二三一六六一二四八五

◆一九九八年日本山岳画協会展

山を愛し、山を描き続けている洋

画家たちによる山を主題とした一〇

号から五〇号までの作品、約三十五

点を展示します。

日時 七月九日(木)～十五日(水)

十一時～十八時三十分(最終

日は十七時まで)

会場 朝日アートギャラリー

東京都中央区銀座四一〇一

TEL・〇三―三五六七―一六七

問合せ 牧潤一(広報担当)

TEL・FAX 〇四二九一六四一七三六九

■会員異動

物故

川上忠義(六二〇七) 9・6・30

尹官炳(五五一七) 9・7・22

寺本健一(二〇四七二) 9・10・2

太田秀春(五二〇三) 9・11・12

豊田春満(一五七二) 9・11・13

福島幸太郎(九九三六) 9・11・2

佐々木豊喜(七四三五) 9・11・25

徳田静雄(二〇二九一) 9・12・2

橋爪幸達(二二六四) 10・1・7

大島栄蔵(七六六二) 10・2・26

名須川浩(二〇七六) 10・4・1

高橋宏一(二七六三) 10・4・3

伊藤紀克(二五七四) 10・4・12

退会

竹内孝(九三三三) 9・11・30

小浜維人(二一六六六) 10・4・30

和田力造(九四二八) 10・4・30

松坂輝義(二一八七) 10・4・30

児玉藤明(一一三四〇) 10・4・30

鈴木千鶴子(一一三四五) 10・4・30

政嘉秀一(七四九三) 10・4・30

鈴木英一(五〇三六) 10・4・30

窪田清(七五九五) 10・4・30

矢島賢治(一一〇八三) 10・4・30

三浦巖(六六〇〇) 10・4・30

斉藤正仁(一一七〇九) 10・4・30

日江井正巳(一九一三) 10・4・30

改姓

河瀬真知(一一六〇四) ↓岩崎真知

終身会員

穴田雪江(四七五六)

高田眞哉(六四五〇)

◆編集後記◆

青年部主催のカンチェンジュンガ登山隊に事故が起こってしまいました。悔しくてなりません。赤坂、椎名両隊員の冥福と、怪我をした隊員の一日も早い完治を祈ります。

今号は中高年特集を組みました。

山に登るほとんどの人たちは、大自然からエネルギーをもらい、健康と長寿の恩恵に浴していると僕は信じます。しかし、中高年登山者の事故は、病態は違っても、高峰登山の過信や油断から起こる事故に酷似している一面があります。変化し続けるからだをさらに踏み込んで思いやり、身を守る知恵を持つことが必要なのだと思います。

会報担当 村井 葵

日本山岳会会報 山 637 号

1998年(平成10年) 6月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤淳生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社